

らめは一步、一步死への旅路を急ぐことになる。フィリピン、ルソンの山にくり広げられた、将兵、民間人ともに入りまじった悲惨な死の行進であった。しかし、いかなる場合でも、不撓不屈の精神力と、適切なる判断と人間としての節度ある行動こそ、自己の健康を維持し、ささやかな明日への希望を見いだすことこそ生還し得たことと思う。もちろん、運と、奇跡、また神佛の加護によることは平時にあっても言うまでもない。

苦しい体験をとおしての願い

福岡県 山下 幸美子

ある日突然、いつも勲章や肩章を沢山つけて馬上に乗りしくまたがっていたその人が、私の屋敷の裏庭に穴を掘り始めた。

軍職を表すすべての物をその穴に葬り始めたのだった。子供心にももったいないと思った。私の前に、終戦はそんな形でやってきた。そう、あの日から一転して私の

頭上で、神は大変な運命のいたずらを始めたのだった。

軍職にあった人は、中国人によって石つぶでの攻撃を受けたと聞く。幸いにも、わが家は日本人の幼稚園の跡地で、中国の子供たちとの格好の遊び場であり親父も深かった。今でもありありと思ひ出す。正月がくるたびに、日本の飛行機は『おめでとう』と書いたピンクやブルーや白のチラシを空いっぱいにまき散らし、風に舞うそれを日本の子供たちも中国の子供たちも夢中で追いかけたものだった。

生活は一変した。中国服のまま、日本には帰らないとあいさつに来た人が何人いたか覚えていない。数日後、編み上げ靴をはかされ、歩行訓練が始まる。引き揚げるために足を鍛えた。

いよいよその日がきた。中国人も日本人も泣きながら、「さらば済南よ、また来る日まで……」と、ラバウル小唄の節で歌った。父と兄は船に乗るまで歩かされ、母は弟が一歳だったために保護されて先に行き、六歳の私と四歳の妹がとり残されて民間の大人たちと一緒にだった。女性には丸坊主に頭を刈り靴の上から靴下をはくという男装

の奇妙ないでたちだった。汽車に乗る時あった荷物は何もかも八路军に略奪された。別れに隣の老婆が作ってくれた支那服も手作りの靴も……。勿論、思い出となる品すべてである。汽車に乗ると言ってもまるで芋でも積むように乗せられ、斜めになった身体はそのまま動かない。窓から屋根から情け容赦なくパローはよじ登ってきた。内地まで帰れないだろうと思った。

汽車から降りた時、二人とも裸足であった。凍てつく荒野を、はだしで四歳の妹をおんぶし、泣き続けるその声を背に、黙々と大人たちの後にただ夢中で続いた。赤ちゃんが死ぬ。中国人に預ける。岩陰に捨てる。一歩遅れれば捨てていかれる恐ろしさに、寒さも痛みもなかった。青島だったと思うが、宿泊所に着いてみると、母と弟ははずでに着いていた。何日後か父と兄が合流。九歳の兄の目は血の色に疲れていた。あの痛々しい目を思い出すと今でも涙がわいてくる。

どこか、これも定かでない。私と妹と二人の時だった。どこかのおばちゃんがゆで卵を一つ下さった。真黒に汚れた手に白い卵……。食べることができず嗚咽がこみあ

げ、みるみる卵は汚れてしまった。貴重な品だった。ありがとう。

今でもそうであるが、当時は赤ん坊を抱えた母にとっておむつはたいへん貴重品であった。ある日、干してあるおむつの番を頼まれていたが、忘れて遊びほおけていて、すっかり中国人にかっぱらわれてしまった。怒った母は、重々しい鉄の引き戸のついた牢屋のような所に閉じ込めてしまった。そこは、そのとおり牢屋だったのである。中央ブロックに鉄の楔が打ち込んであった。四辺の壁に黒い染みが飛び散り、底冷えのするかび臭い異様な空気が私を圧迫した。私はおびえた。恐怖のあまり、私は今もって閉所恐怖症から逃れられない。その母も今はない。

佐世保に上陸、頭から袖口からDDTをかけられ、あれはほんとうに惨めだった。自分が虫けらのように思えた。一歩進み始めて胸のつぶれる光景をそこに見た。瞬間息が詰まった。焼けた灰の中にべしちゃんこの屋根ばかりがずらりと並んでいたのである。

吉岐に引き揚げてからの生活は惨たんたるものであっ

た。五人の子供を抱えているだけでも大変なのに、母は一緒に引き揚げてきた人を同居させていた。布団はわら布団であった。食料は勿論不足。山の木の実、草の実、草の根、食べられる物はあるとあらゆる物を食べた。おかげさまで植物には詳しい。学校に行くのに靴がない。雨の日には裸足。傘の代わりにケットーという毛布のような物を頭からかぶる。教科書もなく友人のを借りて書き写して使った。ノートは不要な紙を袋とじにして使う。皆が立派な大学ノートを使っているのに、ノートの提出日には私のだけがひとしお目立って恥ずかしかった。それでも先生は、粗末なノートに「秀」というスタンプをポンと押してくださった。

母は、教育費の代わりに、子供たちに子豚を一頭ずつ育てさせた。大きくなったら売ってくれるのである。周囲の人たちがバスや自転車を通学する中、私は徒歩であった。しかも背中に大きな食糧の袋を担いで一里の道を。恥ずかしがってなどいられなかった。母の大変さを思うと大きな闘志が湧いてくるのが不思議だった。母は子供を育てるのに命を削るというけれど、それは私の母のこと

とだと思つた。母は五十九年に七十九歳で世を去つた。

二十八年ぶりに中国との国交がなつて、残留孤児の問題が大きくとりあげられた。おのが身の上であつたかと思ふ時、涙なくしてその情景を見ることができなかつた。次から次へ続々と画面に写し出される同年代の人々の、父よ母よと捜し回る姿は、まったく幼子のそれである。なにを今更という人もいるが、私には他人事ではない。心をねじり切られる思いがする。

戦争。一握りの人々の価値判断の狂いから、かくも長きにわたり広きにわたり、人類が苦しみ合わねばならないのだろうか。憎み合わねばならないのだろうか。戦争は人の心の中で起きる。勝たねばならないのだろうか。本当の勝ちとは、何なのだろうか。本当の平和とは何なのだろうか。

そして、ほんとうに平和は来るのでしょうか。否、平和にしなければなりません。世界の各国で、どうか地球をこれ以上痛めつけないでほしいのです。地球上に命あるものすべて、大切にしたいと願ってペンを置きます。